

MY WAY ー私の歩んできた道ー

生涯を地域医療に



社会医療法人 関愛会

会長 なが長 まつ松 のぶ宜 や哉

MY WAY

私の歩んできた道

—生涯を地域医療に—



社会医療法人関愛会会長
(こうざきクリニック院長)

ながまつ のぶ や
長松 宜哉

(4回シリーズ：その1)

はじめに

私は今年の誕生日で65歳になる。父が他界した年齢であり、人生いろいろ考えることが多い。高校入学時に医師になることを決意した私は、自治医科大学に進んで地域医療に取り組む道を選んだ。

そんな私の医師人生で大きな転機となったのが当時の佐賀関町立病院勤務時代だった。大分市との合併を望んでいた佐賀関町は大分市から提示された条件で町立病院を廃止するか受け皿を見つけて民営化するしかなかった。「何とか病院を存続させて今まで通り病気の治療を受けられるようにしてほしい」という地域の人たちの切実な声を受けて同僚医師とともに医療法人を設立し、民間病院として存続させることになった。

その過程でさまざまな政治的思惑が交錯して多くの困難があったが、「地域の医療を守りたい」との一念で乗り切り、2004（平成16）年7月1日、「関愛会佐賀関病院」をスタートさせた。

公立病院時代の補助金依存経営、親方日の丸体質を戒め、経済的に自立、自己責任を明確にする自律を合言葉に、「身の丈経営」方針に徹し、職場の同僚たちの結束と地域の人たちに支えられながら懸命な努力を続けた結果、公立病院の民営化の成功例として全国的に高く評価されるまでになった。

また、国の政策を先取りする形で「地域包括ケアシステム」の構築を一步一步進めてきた結果、大分市東部における医療と介護と福祉の連携態勢が整い、地域の人たちが住み慣れた環境で安心して暮らせる環境が出来上がりつつある。

私は設立10周年を迎えたことを機に人生にひと区切り付ける意味で関愛会理事長を退任したが、父の年齢を超えるこれからも健康が許す限り、なんらかの形で地域医療に貢献する道を歩きたいと思っている。



佐賀関病院

MY WAY

私の歩んできた道

—生涯を地域医療に—

MY WAY



生後半年の頃、兄謙哉（右）と

竹田の商家に生まれる

私は1954(昭和29)年10月3日、竹田市に生まれた。竹田は小藩分立の大分県の中で最も石高の大きい岡藩7万石の城下町で、山あいの地方都市ということで戦災を受けなかったこともあり、子どものころはまだ周囲には古い木造の家並みが残っていた。

私の生家はその竹田の中心部東本町で商業を営んでいて、「長松商店」の看板を掲げて精米や精麦、そして麺類の製造と販売を手がけ、牛乳の販売もしていた。祖父の長松三郎のころは製材業をやっていたそうだが、その祖父はすでに父に家督を譲って別府の上人ヶ浜に広大な土地を購入して隠居生活をしていた。

1925(大正14)年生まれの子の戸籍上の名前は寿一だが、どういうわけか順一という通称を使っていた。母は1931(昭和6)年生まれで父より7歳若く、周子(かねこ)という名前だった。別府から嫁いできたのだが、平凡な見合い結婚だったと聞いている。私は3歳上の兄謙哉と、2歳下の妹かをりとの3人兄弟だ。

父は旧制竹田中学を出てから代用教員をしていたが、その後兵役に召集され、満州(現中国東北部)で終戦を迎えて戦後復員してきた。父は優秀だったので大学に進学して勉強したいという夢を抱いていたよう



3歳の頃、妹かをり（右）と

だが、7人兄弟の長男で家業を手伝わねばならず、すぐ下の弟がまだ高校生で学費がかかるためそれもままならなかった。そのせいか教育熱心で私たち3人の子どものには決して無理に家業を継ぐよう強制することはなく、好きな道を進ませてくれた。

進歩的な考えの持ち主だった父親

父はなかなか進歩的な考えの持ち主で、どちらかといえば社会党(社民党の前身)を支持していた。もともと竹田や大野郡(現豊後大野市と臼杵市野津町)は保守的な風土の一方で、1932(昭和7)年3月の竹田水電の電灯料値下げ運動など革新的な雰囲気もあり、その影響を受けたのかもしれない。

父は私が生まれた翌年の1955(昭和30)年から2年間、大分県連合青年団の第6代団長をつとめている。それまでに産業振興や農業技術の改良、生活改善運動などのほかに広報活動に力を入れ機関紙「青年大分」を発行したり、中国への「平和友情の手を結ぶ県代表」派遣や中国青年の受入れなどを行っている。記念誌などに投稿した挨拶文などを読むとかなり革新的な内容



小学5年生の頃、大学生の従兄弟と

である。

こうした運動傾向はそれ以前からで、ついに1957(昭和32)年の大会でそれに反発するグループが突如脱退し、新たに大分県青年団体協議会を設立して分裂するという騒ぎがあった(2年後に再統一)。そんなわけで父は政治にも興味を持っていて社会党から市議会議員選挙に出たいという気持もあったようだが、母が家業が忙しいことを理由に強く反対しあきらめたらしい。

私の育った昭和30年代は日本が戦災から立ち直って、新たな発展段階をたどった時代で、1956(昭和31)年には「もはや戦後ではない」と言われるようになった。その前年に始まった好景気の波は「神武景気」と呼ばれ2年半続き、1957(昭和32)年から翌1958(昭和33)年にかけての「なべ底不況」を経て景気はV字回復し、1959(昭和34)年には「岩戸景気」を迎えた。そのころ小学校に上がる前だった私にはそんな景気のことなどわかるはずもなく、店の前の道路や近くの広場、お寺の境内などで近所の子どもたちと無心に遊ぶ毎日だった。商家だったのでテレビを買ったのは割と



両親

早く、幼稚園のころ「月光仮面」に夢中だった。

1961(昭和36)年4月、竹田市立竹田小学校に入学した。前年、安保騒動で退陣したあとに出現した池田内閣は国民所得倍増計画を発表し、やがて日本は高度経済成長の時代に突入した。竹田のような地方都市では目に見えて生活が豊かになるということはなかったが、それでも今思うとそのころマイカーを持つ家が徐々に増えていたし、洗濯機が普及。台所からマキが消え、プロパンガスが普及するようになっていた。レジャーブームという言葉がはやったのもこのころである。前にも書いたように父は政治や地域活動には関心を持っていたが、商家の生まれにもかかわらずあまり金儲けには興味がなかった。高度経済成長の波に乗って新しい事業に手を広げるとか、積極的に新商品を取り扱って売上げを大きく伸ばそうということではなかった。ただ正義感が強いとか社会派的とか、自分のことだけを考えるのでなく地域や社会のことを考える人間だった。子どもの教育に熱心だったのも人のために役立つ人間になって社会に恩返しをして欲しい、という考えからだった。

MY WAY

私の歩んできた道

— 生涯を地域医療に —

MY WAY



竹田市少年剣道クラブで(本人：3列目左から4人目)

剣道で心身を鍛錬

竹田小学校に入学した時、児童数は3クラスだったから120人くらいいたのではないだろうか。子どものころの遊びで思い出すのはメンコで、竹田ではメンコのことを「べったん」と言っていた。4年生のとき、友達と電電公社(現NTT)の空き地で「べったん」をしていたら、我が家の方から煙が立ちのぼり消防車がサイレンを鳴らしながら走って行った。大急ぎで帰って見たら裏の以前喜楽館という映画館だった空家が燃えていて大騒ぎになっていた。父親は友人の家に暮を打ちに行っていて留守だった。私はわが家に走り込んで貯金箱と「べったん」を持ち出した記憶がある。

上級生になったころから家の仕事を手伝うようになった。牛乳配達の仕事を手伝ったり、集金に行くようになった。3歳上の兄が竹田中学校で剣道部に入っていたことに触発されて、5年生の時に少年剣道クラブに入れてもらった。週に3回ほど、小学校から帰ると皆で誘い合って竹田警察署の道場に行き後藤健治という先生に稽古をつけてもらった。そのころ、プロ野球ソフトバンクホークスの内川聖一選手の父親内川一寛さんも2年下だが稽古に来ていた。内川選手のお母



竹田高校3年生の頃

さんの赤星かずみさんの実家がわが家の近くにあり、私の妹のかをりとよく遊んでいた。

勉強の出来は1、2年の頃はそれほど目立たなかったが、3年生のころから自分に自信が芽生えて成績がよくなった。いろんな行事に積極的に参加し、クラスの人気者になって級長に選ばれた。5年生の時、児童会の副会長に立候補して当選した。中学生の兄が「正義の味方」という演説の原稿を書いてくれ、それがすぐくみんなに受けたのを覚えている。6年生の時には会長に選ばれた。

1977(昭和42)年の春、竹田小学校を卒業して竹田中学校に入学した。小学校の時に始めた剣道は中学校に入っても続けた。剣道をやっていたからかどうかわからないが、小学生のころはやせっぽちだったのに中学生になると毎年10センチも背が伸びてがっちりした体格になってきた。体が大きくなるにつれて剣道も上達してきたので中学校の間は剣道に夢中になった。3年生の時は竹田市の中学校体育連盟の大会で個人の部で優勝できた。

勉強は小学校の時よりも中学校になってからのほうが

よくできるようになった。授業は聞いているだけで頭に入っていたし、ノートをとるという習慣を持っていなかった。理数系が得意で、自分でも勉強しておもしろかった。

竹田高校入学時に医師の道を決意

1970(昭和45)年に私が竹田中学校を卒業すると同時に兄の謙哉が舞鶴高校を卒業した。当時、竹田あたりでは成績のよい生徒は大分の上野丘高校が舞鶴高校に進学しており、兄も舞鶴高校に進んだのだが、卒業の時まさかの大学受験の失敗があり、浪人することになった。親としては親元から離れたことが一因と考えたのかもしれないが、私には地元の竹田高校に行くように言われた。私としては当然上野丘高校が舞鶴高校に進むものと思っていたし、じつは竹田高校には猛練習で有名な剣道部があるのがすでに自分の中のネックになっていたのだ。中学校の頃から練習に参加したりしており、進学したら、入部せざるを得ない。でも自分はその猛練習が嫌いなのだ。そんなことは親にも言えないが、竹田高校に行きたくないと言ったが却下された。

そして学校側からも地元の竹田高校に進むよう指導された。その理由は成績優秀な生徒が上野丘高校や舞鶴高校に集まると高校間格差がますます広がってしまう、というものだった。そんなわけで本意ながら結果的に地元の竹田高校に入ることになったのだが、この際、全国のレベルを知ろうと腕試しに進学校で全国的に有名な鹿児島県のラ・サール高校を受験した。受験してびっくりしたのは問題の内容がすべて高校レベルだったことだ。全国レベルの高校は1年早く進んでいると実感した。結果はもちろん不合格だった。この経験と兄の謙哉の大学受験の失敗が、竹田高校に入ってから勉強に力を入れる原動力となった。



別府市で開業していた母方の祖父・足達健哉(中央)

そのころ父も母も私たち3人の子どもに「だれか1人くらい医師になってくれるといいのだが」とよく言っていた。特に祖父の三郎は強い願望を持っていた。兄は一浪して早稲田大学の政治経済学部に入学したのだが、この時、父は自分の憧れの大学に合格したと大喜びだったが、祖父は医師にこだわっていた。

そんなわけで私は竹田高校に入学する時から自分は将来兄に代わって医師になろうと決めていた。実はもう1つ医師を志す理由があった。それはそのころテレビで見た「赤ひげ」の番組に大いに触発されたことだった。貧しい人からは治療代を取らない無償の行為を続ける医師の姿に憧れる気持ちが芽生えていた。

別府で開業医をしていた母方の祖父

両親や祖父が子どもを医師にしたがったのにはそれなりの理由があった。父の弟の武文叔父が大阪歯科大学を卒業して大阪で歯科医院を開業していたし、母方の祖父が別府の浜脇で医院を開業していたのである。

この母方の祖父は足達健哉と言い、子どものころ母から別府で医師をしていたことだけは聞かされてい

MY WAY

私の歩んできた道

— 生涯を地域医療に —

MY WAY

た。だが、私が物ごころ付いた時にはすでに亡くなっていて会ったことはなかった。この足達健哉は1874（明治7）年5月、当時の光吉村（のちの大分郡東植田村光吉、現在の大分市光吉）に生まれ、1901（明治34）年に大阪高等医学校を卒業。同校助手および付属病院の医師を務めたあと、1年後に別府の朝見病院に1級助手として勤務するようになった、という。この朝見病院は1880（明治13）年に県内で初めて設立された大分県立病院の初代院長だった鳥瀧恒吉が1898（明治31）年に設立した歴史の古い総合病院である。

健哉はこの朝見病院に1904（明治37）年まで勤務したあと、大分郡滝尾村（現大分市滝尾）の富岡で医院を開業した。医師として地域医療に従事する一方、大分郡医師会副会長や大分県医師会理事、滝尾村議員や大分郡会副議長などの公職についている。別府に移ったのは1928（昭和3）年4月だという。

2年生の時に3年分をマスター

竹田高校の入試の成績は2番だった。入学前の評判通り、優秀な生徒が集まっていた。私は入学した時、1つの目標を立てた。それは2年生の終わりまでに主要科目、特に英語と数学は3年生の分まで自分でやっつけてしまおう、ということだった。心配していたように剣道部へ入るようしつこく言われたがこれを断わり、毎晩8時から午前2時まで勉強した。1学年8クラス、300人くらいの生徒数で、全員が大学に進学するというわけではなく、就職する者もいたが、進学希望者には補習などに力を入れてくれた。

進学希望ということで全県一斉模試やいろんな実力テストを受けさせられ、自分の学力がどの程度の位置にあるのか知らされた。2年生の時、2、3年共通の全県一斉模試があり1番になったことがあった。もっとも3年のとき、なんとなく間延びした感じがして自



自治医科大学の学生寮で

分でも受験勉強に真剣さが薄れてきたような気がした。もう少し早く志望校を絞って取組んでおけばよかったと、あとで思ったものだった。またこんな面白くない受験勉強は3年間で沢山だという思いもあった。

自治医科大学に進む

1973（昭和48）年の春、県立竹田高校を卒業する際、大学受験は医学部一本に絞った。私立大学の慶応大学医学部と国立大学の大阪大学医学部、そして自治医科大学を受験し、結果的には自治医科大学に合格し、そちらに進むことになった。仮に三校とも合格していたらどの大学を選んだか自分でもわからないが、どの大学を選んだとしても研究室に残って専門的な研究をするというよりも、臨床医学に力を入れて病気で苦しんでいる患者さんの治療にあたる医師の生き方を選んだように思う。

自治医科大学に合格した際、地元の大分合同新聞に「郷土の医療に情熱燃やし…」「武蔵町の西村君、竹田市の長松君、見事自治医大パス」の見出しの記事が載った。このとき私は大阪大学医学部の合格発表のため大阪にいて、帰って来てからその記事を読んだ。私



自治医科大学の剣道部の仲間と（本人：左から3人目）

に関する部分は以下の通りだった。

「……もう一人の合格者、竹田高校の長松宜哉君（18）＝竹田市東本町＝は将来人の役に立つ人間、貧しい人を救える人間になろうと高校入学時から医学部志望で勉強してきた。父親の米穀商寿一さん（48）は子どものしつけに大変きびしい人で、子どもたちにことあるごとに世の中の醜さや人間はどうあるべきかを教えてきたという。そうした環境の影響もあり、またテレビドラマ『赤ひげ』に強くひかれた宜哉君は貧しい人々のために尽くすことを決心、辺地医療に生命をかけることにし、自治医大を受験した……」

今読んでみると少し面映い気がしないでもないが、既にかいたように父親の教えや多感な少年時代にテレビドラマ「赤ひげ」に触発されたことは事実だった。

新聞記事には私と西村卓三君の二人の名前が載っていたが、大分県からはもう1人佐藤充弘君が合格し同級生は3人だった。西村君は武蔵町（現国東市武蔵町）出身で国東高校卒、佐藤君は大分市出身で上野丘高校卒である。

自治医科大学は無医地区など医療に恵まれない僻地の医療確保と地域住民の福祉の向上を図るため1972（昭和47）年に全国の都道府県が共同出資して設立し



自治医科大学で臨床実習中

た新しい大学で、私たち3人は第2回生である。名目上は私立大学だが実際には公設民営大学である。学生は全国一律に募集するのではなく、第1次試験は都道府県が行い、自治医大で行われる2次試験で各都道府県枠の合格者を選考する仕組みである。大分県の定員枠は2ないし3で、全国で110人前後である。私たち2回生の時は県内から46人の応募があり、第1次試験で7人に絞られ、2次試験で3人の合格者が選ばれた。参考までに前年の第1回生は後藤憲文さんと竹田津文俊さんの2人で、ともに大分市の出身だった。

自治医大の特徴は何といっても学費がかからなかったことで、授業料が免除されただけでなく毎月1万9,000円の生活費が支給された。これは県から毎月3万円貸与される一部だった。その代わり卒業後9年間出身県の僻地医療に携わることが義務付けられていた。

新進の教授陣と独自の臨床医養成カリキュラム

自治医科大学の所在地は栃木県下野市で、入学当時は開校して2年目ということで、施設はまだ全部はできあがっておらず、附属病院など関連施設の建設工事が急ピッチで進んでいた。周囲には原っぱが広がって

MY WAY

私の歩んできた道

—生涯を地域医療に—

いるだけで環境はよかったが繁華街や飲食店街などがなく、若者にとってはいささか不便で物足りない思いをさせられた。そこで先輩の車に乗せてもらって小山市や宇都宮市のドライブインなどに食事に出かけたりした。

入学当時の学長は東大医学部第3内科の教授だった中尾喜久先生だった。中尾学長は初代学長に就任するにあたって東大医学部から新進の先生方を選びすぎて連れてきていた。そして当時としては極めて新しい消化器内科とか腎臓内科、血液内科など臓器別の講座を設けていた。そして教養、基礎医学、臨床医学などの区切りを付けず、卒業後、ただちに医療現場で活躍できるように独自のカリキュラムを編成していた。

ただ、2年から3年に上がる時に単位を満たしていないと留年させられた。1回生は全員合格したそうだが、われわれ2回生は10人ばかりが留年させられた。私は少しばかり心配だったがが無事進級できた。

自治医大のもう1つの特徴は全寮制だったことだ。大学の敷地内に真新しい寮があり、1人ひとりに個室があてがわれた。7部屋ごとに1つのラウンジがあり、暇なときはそこに集まって話したりした。部屋は名前アイウエオ順に割り振られたので同じ大分県出身の西村君とは隣り合わせになった。

自治医大に入ってから小中学時代にやっていた剣道を再び始めた。1回生が剣道部をつくっていて、そこに入れてもらったのだ。この時、西村君も剣道部に入学し、寮の部屋も隣同士ということで一緒に行動する事が多く大変仲良くなった。剣道ではよく他の大学との対抗試合などに出場した。顧問はのちに昭和天皇の手術の執刀医を務めた外科の森岡恭彦教授だった。森岡教授自身は剣道はまったくやらなかったが、よく部員を飲み連れに行ってくれた。森岡教授に限らず、大学の敷地内に教職員住宅があったので食事に招かれ

るなど教師と学生の距離が非常に近かった。

夏季実習で県内の診療所を訪問

毎年、夏休みは夏季実習と言って出身県に帰って僻地の診療所に行かされた。まだ学生なので診療行為はできなかったが地域医療の現場を見せておく、というのがその目的のようで、在学中、九重町の飯田高原診療所や鶴見町（現佐伯市鶴見）の丹賀診療所、姫島村診療所などを訪れた思い出がある。1人の医師が地域の人たちに身近に接しながらいろんな病気の治療に当たっている様子を間近に見て自分の将来の姿と重ね合わせた。夜は町村長さんとの懇親会で新鮮な魚や一夜干しのイカを着にいっぱい飲みながら、若者の流出や地元産業の不振など、地域が抱える悩みや将来構想などを聞かせてくれた。地域住民の健康を守るため自治医大に大きな期待を寄せていることを何度も聞かされ、自分が十分それに応えられるだろうかという不安とともに使命の大きさを自覚したのだった。

卒業の際に受ける医師国家試験には全力で取り組んだ。県民の納める税金で勉強させてもらっているのに万一不合格になったら申し訳ないし、恥ずかしい限りだという思いがあった。おかげで無事合格し、どうやらふるさとに顔向けができた。落第した学生は1人もおらず合格率100%だった。

卒業式のとき、中尾喜久学長から「慈」と書いた色紙をいただいた。「慈愛」「慈悲」の「慈」で、これから地域医療の現場で働くにあたって常に「慈（いつくしみ）」の心を忘れないように、との深い教えが込められていた。あとで知ったことだが第1回生は「忍」、第3回生は「努」という字だったそうである。

（つづく）

ヒアリングにて当研究所が執筆

MY WAY

私の歩んできた道

—生涯を地域医療に—



社会医療法人関愛会会長
（こうぎきクリニック院長）

ながまつ のぶや
長松 宜哉

（4回シリーズ：その2）

県立病院で初期研修

1979（昭和54）年3月、自治医科大学を卒業した私は郷里の大分県に帰り、県職員に採用された。そして大分市の県立病院で研修医として2年間の初期研修に入るようになった。

ちょうど同じ時期に妹のかをりが大学を卒業し、大分市内の高校に臨時講師として勤めるようになり、同じアパートに住むようになった。

両親は同時に2人の子どもの教育を終えてほっとした様子だった。

現在の県立病院は大分市南大分の豊饒地区にあるが、これは1992（平成4）年8月に現在オアシスタワーが立っている高砂町から移転したのである。したがって私が研修医として勤務したのは移転前の県立病院だった。

この県立病院は1880（明治13）年3月に開設された古い歴史を持つ県内を代表する病院で、それだけに、入口のがんセンター部分は別にして病棟などの建物は古く、狭い敷地に次々に建て増したため施設の配置が複雑で分かりにくかった。

そのころの院長は徳岡三郎先生で、病院部門に21科・部、がんセンターに13科・部があり、ベッド数は610床（一般病床531、結核病床54、伝染病床25）だった。

施設は古かったが、何とんでも県内を代表する基幹病院であり医療機器なども他のどの病院よりも整っていて、自治医科大学卒業後の初期研修は当然この県立病院が予定されていた。



佐賀関病院

MY WAY

私の歩んできた道

—生涯を地域医療に—

MY WAY



2人の卒業を記念し家族で記念撮影
(本人：後列右端、妹：前列右端)

当時珍しかった多科ローテート方式

私はこの県立病院で自治医科大学同期の西村卓三君と佐藤充弘君の3人で研修を受けた。

研修は当時では珍しい多科ローテート方式といわれるもので、単一の科を研修するのではなく内科系、外科系、小児科、産婦人科、救急等を3～4ヵ月かけて順次回っていく方式だった。

県立病院ではすでに1期生の竹田津文俊先生と後藤憲文先生がローテートしており、先輩方の評判も高かったため、われわれの研修もすんなり引き受けていただいた。

最初に研修に入ったのは神経内科だった。そこには有名な永松啓爾先生が部長をしておられた。同じ「ながまつ」だったので、区別をつけるために私は「ちょうまつ」と呼ばれるようになった。何事も最初が肝心で、以後県立病院ではずっと「ちょうまつ」と呼ばれるようになってしまった。



初期研修の頃の県立病院

県立病院での研修は1診療科あたりの日数が短く充分とは到底言えなかったが、ひと通りいろんな診療科を経験させてもらったことはのちに大いに役立った。特に判断に迷っていた時に経験豊かな先生方から専門的なアドバイスをいただいたことはありがたかったし、いっしょに仕事をするなかで患者さんへの接し方を、身を以って教えてくれるなど臨床医として1人立ちするうえで参考になることが多かった。

自治医科大学同期の西村君や佐藤君とは何かにつれて飲みに行ったりはいろんな悩みや不満、将来のことなどを語り合ったが、第1期生の竹田津先生と後藤先生からもその経験に基いた様々な助言をしてくれて助かった。

自治医科大学は新しい大学のため、こうした先輩が少なく2人のアドバイスは貴重だった。後年、私が自治医科大学の卒業生の研修にできるだけ便宜を図り、働く場を確保しようと取組んだのも、こうした経験によるものだった。

今でこそ働き方改革等で研修医の過重労働が問題視されているが、当時はずっと病院にいるのが常識だった。忙しくしていないと研修していないような気に

なっていた。

当時の県立病院は繁華街の都町にも近く、歩いて食事や飲みに出てそのまま病院に帰る生活が普通だった。

妻祥子との結婚

そんな中で2年目を迎えると、同期の医師たちが立て続けに結婚した。4月に佐藤君が結婚し、5月に西村君がなんと私の妹のかをりと結婚した。

独り身の私は外科の渡辺英宣先生の紹介で知り合った、先生の義理の妹の甲斐祥子さんと1981（昭和56）年1月に結婚した。仲人は当時、自治医科大学から三重病院に派遣されていた前沢政次先生にお願いした。自治医科大学の先生方（血液内科の高久教授、外科の森岡教授）も気軽に結婚式に出席していただいて大いに恐縮した。

研修2年目は将来選ぶ専門科を意識して、その科に長くいられる仕組になっていた。私は6月から第3内科に配属され、おもに血液内科、呼吸器内科を診ることとなった。

第3内科の先生方は人格高潔で優秀な先生方ばかりでよく指導していただいたが、後半、退職してグループ開業することが判明。しだいに医師不足となり、研修医にもかかわらず私も外来診療要員にも駆り出された。この時期、ベッド数の規制が始まる前で駆け込み開業が多かったようだ。ほかの科の先生方も開業され、私の研修にも影響が出始めた。

私が県立病院で初期研修をしていた昭和50年代中期は大分県にとっても、日本の医療にとってもいろんな意味で転換期を迎えていた。県内では1978（昭和53）年4月に国立大分医科大学（現大分大学医学部）が開学。附属病院の建設工事が急ピッチで進められ、1981（昭和56）年10月に第1次計画として15診療科320床



小児科での研修

がオープンするなど、次々に新しい医療施設ができた。

一方、疾病構造が変化し、かつて国民病と言われて恐れられていた結核が急速に減少した半面、ガンや心臓病、脳卒中など生活習慣病が死因の上位を占めるようになった（当時は成人病と言っていた）。この生活習慣病の増加は人口の高齢化と関連していて、のちに私が取組む地域包括ケア（まだこの言葉はなかったが）の必要性が叫ばれ始めていた。

県立療養所三重病院に赴任

こうした疾病構造の変化に対応していくにはいろいろむずかしい問題があった。

そのよい例が、のちに私が勤務することになる県立療養所三重病院だった。三重町（現豊後大野市三重町）にあった同病院は、1957（昭和32）年に結核専門の病院としてオープンし、その後内科や外科も設けられた。

1980（昭和55）年1月、県は結核患者の減少を理由に4病棟のうち1病棟を閉鎖して3病棟に減らす計画を発表した。これに患者団体や地元町村、労組などが

MY WAY

私の歩んできた道

— 生涯を地域医療に —

MY WAY



建て替える前の県立療養所三重病院

強く反対し、県は2月に縮小計画を棚上げした。ところが3月になると今度は医師を派遣している熊本大学が「患者が減っている結核専門の三重病院では技術の向上が期待できない」「研究施設が貧弱で魅力がない」として総引き揚げを通告してきたため、三重病院は存続が危ぶまれる事態に陥った。

この三重病院には私より先に1期生の竹田津先生が1980（昭和55）年6月に派遣された。この竹田津先生の要請で自治医科大学から血液内科病棟医局長兼医局長の前沢政次先生が副院長兼内科部長で三重病院に着任され、翌1981（昭和56）年4月には県立病院を退職した徳岡三郎先生が院長として着任した。

一方、県は熊本大学の医師引き揚げ問題を契機に県立病院とこの県立三重病院のあり方を県立医療施設整備審議会に諮問し、専門家を交えて将来構想を検討してもらった。その結果、三重病院を脳卒中や高血圧など生活習慣病の診療とリハビリテーション施設として全面的に建替え、県立病院についても将来の移転新築に備えて基金を積み立てていく、との答申が6月に出された。

私はこの三重病院については郷里の竹田に近いこと

もあり、関心を持って事態の推移を見ていたのだが、徳岡先生が院長として着任される前の2月にまだ県立病院で初期研修中だったところに研修目的でその三重病院に勤務するよう命じられた。

私は妻の祥子とともに三重町大原にあった医師の住宅に引越し、三重病院での診療にあたることになった。正式に三重病院に派遣されたのは6月だった。

赴任してみると確かに三重病院は古く、木造のため廊下を歩くと靴音がし、所々に穴が空いていた。天井も何ヵ所か雨漏りがするという状態だった。内科と外科を加えて4病棟・232床だった。

自治医科大学から来ていた前沢先生は私が赴任してから1ヵ月後に母校にもどり、その後任に飛田系太先生が着任した。建物は古く、元々結核療養所ということで空気のきれいな町はずれだったにもかかわらず、なぜか地域の人たちから大いに頼られ、また信頼されていた。

少ない医師で入院、外来の両方の患者の診療に当たらねばならなかった。外来患者だけでも1日に50人くらい診察したうえ、それと同数の入院患者を担当しなければならず、いささかワーカーホリック（仕事中毒）気味の毎日だった。

全面建て替えを予定しているため、患者を増やして収益を伸ばすことが求められ、どんな相談にも応じる「断わらない医療」を心がけた。

長男翔太郎が誕生

赴任した年の12月10日、妻の祥子が無事出産した。大分市の実家に帰っていて男の子を産んだのである。誰でも初めてわが子を抱いた時の感動は忘れられるものではない。私はこの初めての子に翔太郎と名付けた。翌年5月、宿舍の庭に鯉のぼりを立て、他の同僚医師から大いに羨ましがられた。

県下一円から患者が訪れる県立病院と違って三重病院の患者は地元の人を中心である。結核病棟の入院患者は長期入院がほとんどで、将来への強い不安や家族との断絶などいろんな悩みを抱えている人が多い。よい治療するには医師と患者が信頼関係で結ばれることが大切だと考え、患者とのコミュニケーションを大事にした。

医師と患者という垣根を取り払い、患者が何でも言える関係づくりに腐心し、家庭的な悩みなどにも親身になって相談に乗った。おかげで農家の患者から野菜やシイタケなどをいただくことが多く、断わるのに苦労するほどだった。

2年目の4月、一緒に仕事していた竹田津先生が後期研修のため母校の自治医科大学に戻り、その後任に3期生の佐藤隆美君が赴任してきた。小児科が専門だが何にでも興味を抱いて積極的に取り組む超優秀で行動力のある医師だった。

2年目の後半になると三重病院の全面建替え計画が具体化されるようになった。マスタープランが公表され、総事業費35億円で1年後の1982（昭和57）年10月に建設工事に着手し、2年後の1984（昭和59）年秋に完成させるというものだった。計画では新病院は鉄筋3階建ての管理外来棟と2階建て中央診療棟、5階建て一般病棟（165床）、平屋の結核病棟（55床）、看護師宿舍などからなり、総面積はそれまでの2倍となる9,900㎡に拡大。また地域医療研究室の設置や太陽熱を利用したソーラーシステムの設置など新たな計画が盛り込まれていた。

母校自治医科大学で1年間の後期研修

施設の老朽化と医療設備の不足を日々実感していた私は、このマスタープランの1日も早い実現を期待した。だが、1983（昭和58）年4月から自治医科大学で



新築された三重病院

の後期研修が予定されていて、後ろ髪を引かれる思いで妻の祥子と1歳4ヵ月の幼い長男翔太郎を連れて自治医科大学に向かった。

自治医科大学での後期研修は1年間で、その間、県職員の身分は休職扱いだった。そのため給料が出ず、貯金を取り崩して使った。4年振りに同期の者と再会し、それぞれ地元での初期研修や僻地中核病院での経験の話などをした。私は三重病院から自治医科大学に戻り、地域医療学講座を開いていた前沢政次先生に付いて地域医療学の勉強をする傍ら、初期研修でやれなかった腎臓内科での血液透析の研修を行った。

私はしばらく遠ざかっていた母校での医学研究の進歩に驚くとともに、これから地域医療に取り組んでいくにはいろんな面で自治医科大学の先生方や全国に散らばっている卒業生の仲間と連携していくことが大切だと感じた。

この後期研修でそれまでにやってきた地域医療の整理ができ、専門医としてではなく総合医として生きていく心構えができたように思う。大変お世話になった前沢先生は三重病院赴任を機にそれまでの専門医からプライマリ・ケア医へと転じ、のちに北海道大学医学

MY WAY

私の歩んできた道

—生涯を地域医療に—

MY WAY



新設の因尾診療所 (提供: 大分県)

部の教授、名誉教授となり、日本プライマリ・ケア学会の会長も務められた。

自治医科大学での後期研修が終ると南海部郡本匠村(現佐伯市本匠)の因尾診療所への赴任が内定していた。しかし、その年の12月ごろ、県環境保健部長から「三重病院の収益が医師の減少で低下しており、このままでは全面建て替えにも影響が出かねないので早めに戻って、とりあえず三重病院の診療に加わって欲しい」との連絡があった。

三重病院に短期勤務のち因尾診療所へ

私も三重病院のことが気になっていたので後期研修を1、2ヵ月早く切り上げ、翌1984(昭和59)年2月ごろ大分に帰って来た。この時、フェリーで宮崎県の細島に着き、大分までの途中、因尾診療所がどこにあるのか下見しておこうと寄り道した。実は最初に本匠村因尾地区と聞いてもピンとこなかったし、妻の様子にどこなところか見てもらって安心させようと思ったのだった。

ところが運悪く大雪の降ったあとで途中までしか車が行けず、引き返してしまった。しかも目の前を大き

なイノシシが道を横断してびっくりさせられてしまった。

大分に帰った私は県の指示で短期間だが再び三重病院に勤務するようになった。ほぼ1年振りで、入院患者から懐かしがられ、久しぶりに病院を訪れてきた患者から「先生、またお世話になります」と喜ばれた。そのころ、すでに古い建物の一部が取り壊されて新しい病棟の建築工事が始まっていて、しだいに新しい病院の姿見え始めていた。

6月からの因尾診療所への赴任までの間、三重病院で因尾診療所に勤務する看護師の研修をしてもらった。因尾診療所は新設のため看護師も新たに採用し、研修を受けてもらうことになったのだ。

また、当時の本匠村の小野友重村長と地域包括ケアの先進地だった岩手県沢内村まで病院の視察に出かけたりした。この病院では訪問診療を積極的にやっていた。この病院では訪問診療を積極的にやっていた。こうした先進地視察は大変有意義で、小野村長も大変感心していたが、私自身ものちに地域包括ケアに取り組むうえで大いに参考になった。

本匠村は典型的な山村で、番匠川に沿ってわずかに平地があるだけで、それ以外は山また山で、林業が主な産業だった。人口は2,000人ほどで、役場のある波寄地区に多く住んでいた。この地区はまだ佐伯市に近かったが因尾地区はかなり上流の奥地だった。以前、近くの井ノ上地区に開業医がいたが高齢で亡くなり、無医地区になっていた。

その当時、県内にはそうした無医地区が34市町村で72地区あり、僻地中核病院による巡回診療でカバーする一方、市町村に特別の補助金を出して診療所の開設や医療機器の整備を進めていた。因尾診療所はこうした制度に則って小野村長が開設したのだった。この当時県内には11町村1広域組合に20の町村立診療所が



長男翔太郎を肩車して散歩 (提供: 大分県)

あったが、医師を確保できず休止しているところもあり財政負担も大きかった。

真新しい診療所の初代院長として

因尾診療所では初代の院長ということで多くの患者を診て収益を確保する必要があり、1日に30人くらいの患者を診察した。診療所にはレントゲンやエコー検査、胃カメラの設備が揃い、一応一通りの治療ができるようになっていた。看護師は最初1人だったが、のちに2人に増えた。

患者は膝痛や腰痛を訴える高齢者が多く、また、小児ゼンソクを患う子どもも多く、県立病院での初期研修で小児科を経験したことが大いに役立った。山村らしくマムシに噛まれたとか、怪我をしたといって駆け込んでくる患者もいた。

因尾診療所に着任して間もない7月27日、次男の顕太郎が生まれた。長男の時と同じように妻の実家のあ



訪問診療風景 (本人: 左端 (提供: 大分県))

る大分市で産んだのだが、やがて診療所に併設されていた医師住宅で子育てするようになった。長男翔太郎は3歳になっていてかわいい盛りである。交通不便な田舎ではあるが、周囲は木々に覆われた山ばかりで空気は良く、水もきれいで子育てには最適な環境だと思った。

奥地への訪問診療も積極的に

この因尾診療所にいたころは奥地への訪問診療も積極的に行った。

バスも通っていない谷の奥のほうにも点々と人家があり、若い家族がいて診療所まで車で連れてきてもらえる人はいいが、お年寄りだけの家では風邪を引いたからと言って診察を受けに来ることもできなかった。

車で行けるところまで行って、それから崖の上の家まで歩いて行って診察、というところも多かった。

そんな時、医師も体力勝負だと思ったものだった。こちらはそれが自分の使命であり仕事と割り切っていたのでなんでもなかったが、患者本人や家族が気の毒がってしきりに恐縮するので、逆にこちらが恐縮する始末だった。

MY WAY

私の歩んできた道

—生涯を地域医療に—



酒を酌み交わして懇親を深めることも大切
(因尾地区にて、本人：右から3人目 (提供：大分県))

こうしたところの患者には薬ひとつ届けるのも大変で、その近くの方が何かの用事で診療所あたりまで来たときに届けてもらうこともあった。

ある時、谷の奥の方の家に訪問診療に行くと、その表情などから「筋強直性ジストロフィー」というめずらしい病気だとわかって驚いた経験がある。あまりむずかしい病気に出会うことはなかったが、重傷や急患の場合はこの地域の基幹病院である佐伯市の南海病院に連絡して引き受けてもらった。救急車に同乗して患者に付き添って佐伯まで行ったこともあった。

地区でただ1人の医師ということで地元の皆さんから頼りにされた。何かの用事で佐伯に出かけ、夜自宅に帰るとそれを見計らったかのように一斉に電話が架かってきたことがあった。医師住宅の灯りが点つたので私が帰宅したことがわかり、待ちかねたように電話してきたのだ。こんな時、自分がいかに地域の人から頼りにされているのか、を思い知らされたものだった。

脳裏に焼き付いた地区民総出の見送り

因尾診療所では、近所の人や患者からよく野菜などいただいたし、私が酒好きなことを知ると、イノシシが捕れたと連絡してきて一緒に内臓を切り分けて酒の肴にして飲んだことがあった。また、この辺りは番匠川の上流なので水がきれいでアユが多く釣れた。地元の人に誘われてアユ釣りをし、釣れたアユで一杯飲んだのはいいが、大事にしていた腕時計を無くしたのは残念だった。

私はこの因尾診療所に2年間いて、1986(昭和61)年春、佐賀関町立病院に移ることになった。私は妻の祥子と4歳の長男翔太郎、近く2歳になる次男の顕太郎を連れて因尾地区をあとにした。

出発の日、地元の人たちが総出で道の両側に立ち並んで私たち一家を拍手で見送ってくれた。あのときの光景はいまも私の脳裏にしっかりと焼き付いている。

(つづく)

ヒアリングにて当研究所が執筆

MY WAY

私の歩んできた道

—生涯を地域医療に—



社会医療法人関愛会会長 (こうざきクリニック院長)

ながまつ のぶや
長松 宜哉

(4回シリーズ：その3)

佐賀関町立病院に赴任

へき地診療所である因尾診療所勤務の後は後期研修を選ばず、中核病院勤務を希望した。自治医科大学の義務年限もあと3年で終了となり、早く義務を果たして自由になりたいからである。これまでの経緯を考えると県立三重病院勤務になると予想していたが、県の人事は佐賀関町立病院勤務だった。佐賀関町立病院は私の一つ後輩で外科を専攻していた足立昌士先生が3年目に自治医科大学卒業生として初めて赴任した病院である。当時外科の指導医もいない、一人外科医として行かされ、中核病院としての装備も整っていない中で、へき地診療所勤務扱いとして赴いた病院であった。彼は佐賀関町立病院で頑張り、佐賀関町の自治医科大学卒業生の評価を高めていた。専門科こそ違えど、足立先生の後を任されることにやる気と緊張感をもって赴任することとなった。

1986(昭和61)年、当時の佐賀関町は北海部郡だが一つの郡に一つの町だけだった。現在の速見郡日出町と似ているが、結果一郡一町となっているところは、独立で運営するほうが経済的・財政的にも安定しているからなのだろう。佐賀関町でその繁栄の中心を担ったのが旧日鉦佐賀関製錬所(現在はパンパシフィックカップパー佐賀関製錬所)であり、ピーク時には3千人の社員を抱えていた。

私が赴任した当時の佐賀関町の人口は約1万7千人で、土地が狭いせいか妙にごちゃごちゃした町という印象だった。佐賀関町には佐賀関町立病院とともに日鉦佐賀関製錬所が開設した製錬所病院も昔からあって、製錬所社員の診療にあっていた。

昭和40年代から50年代は銅製錬で出てくる有害物質による大気汚染、海水汚染が問題となり、公害問題へと発展した。「八号地問題」



統合後の佐賀関町立病院(金山)

MY WAY

私の歩んできた道

— 生涯を地域医療に —

MY WAY



衛藤院長退任記念の集合写真（本人：前列右から4人目）

は公害や環境汚染を心配する住民らが強い反対運動を起こし中止に追い込まれたことで有名である。私が赴任したころはすべて解決した後だったが名残はあちこちにあった。

佐賀関町はミカン栽培に代表される農業と関アジ、関サバに代表される漁業も盛んな地域だった。しかし狭い土地のせいで跡継ぎ以外の者は町外に出るか、製錬所やその関連事業所に勤めるしかなかった実情もあり、佐賀関町全体が佐賀関製錬所と持ちつ持たれつの関係だったのだろうと今にして思うところである。

そういった土地柄で気性が激しい、声の大きい人が多かった。独特の言葉もたくさんあった。しかしいったん信頼関係が生まれると本当に良くしてくれる人たちが多かった。山間部の竹田の生まれの私はなぜか佐賀関の空気と水が合っていたように思う。赴任当時の佐賀関町は大分市中心部から車で一時間弱だったので、大分市から通勤することもできたはずだが、当時へき地診療所に家族で赴任していた私たちは病院の近

くに住むことが普通と思っていたので、迷わず佐賀関町立病院の医師官舎に引っ越した。当時、町立病院は現在市営住宅が建っている鮮浜通り（通称）の高台にあった。官舎はそのさらに上の福正寺のすぐ下にあった。子供は地元の幼稚園に行き、妻はすぐ地元の人たちとなじんでいたようだった。

製錬所病院との統合

着任当時、病院は産婦人科の衛藤英一院長以下大分医科大学から内科医一名、福岡大学から整形外科医一名、外科は自治医科大学の後輩が一名来ていた。私を含めて常勤5名体制だった。CTスキャンもない病院であったが、なぜか全町内の救急患者がいったんここに集められるシステムになっていた。どんな症例でも救急車はいったん町立病院に搬送するというのである。三重病院でも因尾診療所でも断らない医療を行ってきたつもりであるが、このシステムには閉口した。忙しいし、重症者はほとんど大分市の病院に搬送せざ

るを得ないからであった。官舎にいたため、夜間・休日の呼び出しも本当に多かった。

もう一つ気になったことは町立病院がのんびりしていたことだった。お祭りがあるといえば休診、メーデーも休診とのんびりしていたが、私の町立病院での1年目はあつという間に過ぎていった。

2年目に入るところ衛藤院長が退職するという話が出てきた。同時に九州大学医学部から地元出身の新しい院長が来るという。1987（昭和62）年4月、衛藤院長が退任し、九州大学医学部第2外科出身の平本陽一朗先生が新院長として赴任された。1951（昭和26）年生まれで、私より3年上の先生だった。当時の渡辺一町長が病院再建のため三顧の礼で招いたということだった。

平本院長になって、製錬所病院と町立病院の統合問題が表面化した。どちらも100床以下の小病院で経営的にも行き詰っていた。特に製錬所病院は日鉱佐賀関製錬所が親会社とはいえ、親会社自身が円高による影響を受け、経営効率化の必要性に直面しており、不採算部門の整理は避けられないところであった。町側の発案で製錬所病院を町立病院に吸収して病院を一本化し、増床、設備の充実を図ることになった。結果、130床の一般病院となるのだが、本来ならこの時点で新病院を建設することが良かったのではないかと考えた。しかし新病院建設は計画にも上がらず、敷地が広がった金山地区にあった旧製錬所病院の建物を改修して使用することになった。

父の死

1987（昭和62）年8月、製錬所病院と町立病院は統合され、金山に新しい佐賀関町国民健康保険病院（以下、佐賀関町立病院）が誕生した。それまでに製錬所の看護師をはじめとする職員と統合の話し合いが何度



統合後の佐賀関町立病院の待合室

かあったが、この時まさか約20年後に再び民営化という嵐に遭おうとはだれも思わなかったであろう。新病院になってCTスキャン等診断設備も充実し、佐賀関のいびつな救急体制の改善に少しは寄与できるようになった。また、年によって異なるが、医師も自治医科大学からは外科医、小児科医、内科医が派遣され、大分医科大学からは外科医、内科医が派遣されるなど医師の派遣体制も軌道に乗ってきた。地域住民の信頼も徐々に高まってきて、私の患者さんも多くなった。内科の若い先生の指導をしながら、外来へ病棟へと忙しい日々を送っていた。

翌年の夏、父が病魔に襲われた。悪性リンパ腫でなかでも悪性度が高い腫瘍だった。抗がん剤治療、放射線治療などを行ったが、1989（平成元）年5月に永眠した。父の死は自分が若かったせいかショックだった。主治医を当時県立三重病院副院長だった坪山先生にお願いしていた。当然自分の病院では設備が整っていないので診られない。自分が手を出せない当時の心境は複雑だった。父は闘病中、自分の弱った姿を孫に見せたくないとい一切面会させなかった。また夜遅く回診にきてくれる坪山先生を見て、自分の子を医者にし

MY WAY

私の歩んできた道

— 生涯を地域医療に —

MY WAY

たのは間違いだったかもしれないと母に言ったという。なぜなら一日中働いているのは辛すぎる、辛い道に入らせたということであった。父の療養態度は三重病院の職員も心に残る立派なものだったらしく、今でも当時の看護師が話題にするほどである。

民間病院へ転職

ちょうどその5月いっぱい、自治医科大学卒業後のへき地勤務9年間の義務年限が終了した。義務年限終了後は先輩の竹田津先生は東京大学の大学院に入学したが、多くの卒業生は母校の自治医科大学に帰っていた。本来ならもっと早い時期（出来れば1年前）に義務年限後のことは考えていなければならなかったが、父がどうなるかわからなかった時と重なり、母からも県内にいてほしいといわれていたので、とりあえず県内残留を決めた。しかし大分県職員として残るならば、当時は県立病院などにポストもなかったもので、またへき地診療所に行かねばならないし、県立三重病院からも声はかからない。ならば佐賀関町立病院にこのまま残留するかといえば、どうも居心地が悪い感じもあった。そこで、私はいったん県職をやめて、佐賀関町立病院からも離れて、民間病院に移ることにした。移籍先は医療法人岡仁会大分共立病院であった。実は研修医時代から理事長院長の岡嘉彦先生と、事務長の山上秀登さんを知っており、特に山上さんからは折に触れて義務年限明けは共立病院に来てほしいと誘われていたからである。自分自身もぬるま湯のような公立病院の雰囲気より、必死に経営している民間病院の内情を知りたかったし、自分の性に合っているのではないかと感じていた。まだ佐賀関町立病院在籍中の3月末に佐賀関町の官舎から、大分市中島に家族で引っ越した。長男の小学校の転校があったからである。



一尺屋診療所

この大分共立病院は基本外科系の病院で、大分医科大学第2外科内田教授の関連病院になっていた。内科医は私一人で副院長を拝命した。また当時の大分医科大学第2外科に入局したての1期生から3期生が半年ごとのローテーションで常勤医となって勤務することになっていた。大分医科大学開設当初の卒業生と接することができ楽しい日々を送ることができた。

人事権のある副院長として再び佐賀関町立病院へ

私が退職してから、佐賀関町立病院では内科の責任者として九州大学医学部で院長と同期だった藤野孝雄先生が副院長として着任された。藤野先生は実家が臼杵の荘田医院（現在は藤野循環器科内科医院）で、お母さんが診療をしており、その跡を継ぐために大分に帰ってきた先生だった。臼杵に帰るまでという条件付きだったそうだ。しかし翌年にはお母さんの健康状態が悪くなり、臼杵に帰らなければならなくなったとき、後任は大分医科大学の医局からではなく、私が適任だと院長に進言してくれたそうだ。院長は私に戻ってくるよう依頼してきた。私はこれまでのような普通の常勤医ではなく、病院の運営にかかわる「人事権の

ある副院長ポスト」を条件に再び佐賀関町立病院に戻るようになった。1990(平成2)年11月のことである。その年の4月には三男の晋太郎が誕生していた。以前から佐賀関町立病院には自治医科大学卒業の若い医師がローテーションで来ていたが、私は将来こうした地域医療に情熱のある自治医科大学の後輩医師を正規の職員として受入れて、小規模ながらも自治医科大学の基幹病院にしたい、との思いから人事権を有する副院長ポストを求めたのである。

1996(平成8)年、町内の一尺屋地区で長年開業し地域医療を守ってきた阿南医院の阿南先生が倒れて閉院することになり、医院を町に寄付するから町立病院で後の運営をしてほしいとの依頼があった。そのころ総合診療科を目指していた、自治医科大学の後輩になる米野壽昭先生と相談し、一尺屋診療所として運営を開始した。午前中の診療だが、主に米野先生が診療をし、私も木曜日だけ担当するようになった。一尺屋診療所も地域の方にたいそう喜ばれたし、我々が訪問診療を開始したりして、病院の外に積極的に出ていく医療のきっかけとなった。そのころから県内のへき地診療所の代診業務も積極的に行うようになった。

地域包括ケアシステム構築のきっかけ

米野先生の就職をきっかけに、1999(平成11)年にはアルメイダ病院呼吸器内科に就職していた甲原芳範先生が佐賀関町立病院に来てくれた。また整形外科は同年に城日出徳先生が赴任し、そのまま常勤医となった。2001(平成13)年にはどうしても病院に透析室を作りたかったので、当時自治医科大学腎臓内科で講師をしていた増永義則先生を口説いて大分に帰ってきてもらい町立病院に就職してもらった。そして小さいながら5床の透析室が完成し、佐賀関町の透析治療が幕

を開けることになった。

医師の定着化も順調に進んでいき、ローテーションで1~2年当院に従事する大分医科大学出身医師、自治医科大学出身医師と共に働くことで佐賀関町立病院の存在を若い医師に印象付けることができるようになった。

2000(平成12)年介護保険制度が導入された。佐賀関町でも通所介護事業所と訪問介護事業所、居宅介護事業所、そして町の保健業務を行う保健センターが合体して業務を行う、町立の「介護保健センターひまわり」が病院の前に建設され、所長に私が兼務で就任した。佐賀関町の介護士と保健師の仕事の責任者となったのである。これが地域包括ケアシステムを構築するきっかけになったと思っている。

すでに高齢化が進んでいた佐賀関町では介護保険の利用者はたくさんいて「ひまわり」の介護事業はほとんど収益を上げるようになった。そのため病院事業の赤字をカバーするようになり、病院事業と介護事業を合わせ、2003(平成15)年からは少し黒字が出るようになった。佐賀関町立病院の将来に明るい光が差してきたことを実感した。

大分市との合併前に佐賀関町立病院の民営化

そのころから県内でも市町村合併の動きが始め、2002(平成14)年くらいから活発になってきた。県が示した合併パターンでは佐賀関町は大分市と合併することになっていて、町民の大多数も大分市との合併を望んでいた。大分市との合併を望んだのは佐賀関町だけでなく、野津原町や犬飼町も県の合併パターンとは異なって大分市との合併を求める動きをした。しかし、大分市は新たな財政負担が増えることを懸念してこれらの町との合併に消極的だった。佐賀関町との合併については、町が赤字体質の佐賀関病院を抱えてい

MY WAY

私の歩んできた道

—生涯を地域医療に—

MY WAY



合併問題を話し合う佐賀関町議会の特別委員会



増永義則先生



甲原芳範先生



城日出徳先生

ることから市議会などで異論が噴出し、やがて「公立病院をもたない」との方針を固め、合併の条件として佐賀関町立病院を解散するか、民営化するように求めてきた。我々の病院が直接合併取引の中心的な問題となったわけでどうなるのか他人事ではなかった。

私は民営化にあたっての一つの選択肢として地域医療振興協会による指定管理者制度があるのをどうしても町長に知ってもらいたかった。地域医療振興協会は自治医科大学の卒業生たちが中心となり設立した公益法人で、経営状態のよくない地域の公立病院を指定管理者となって運営し、急成長しているところだった。2002（平成14）年末と記憶しているが、私は地域医療振興協会の理事長に佐賀関町立病院の公設民営の話を提案し、一度大分市で町長に会ってもらった。町長の反応はいまひとつだったのであまり興味がわかなかったのだらうと思っていた。町長からその後、地域医療振興協会に関する話は一言も出なかった。ところが2003（平成15）年に入り、急に町立病院内に新病院建設の話が出て、どんどん具体的な話として煮詰まり、設計図まで完成したのである。また後で分かったことだが、県に補助金（医療近代化整備資金）の申請もし、

国からの許可を得ていたのである。

私は地域医療振興協会との協議が進んでいるのか不安になっていた。指定管理者制度では合併先の大分市とも事前に協議しなければならないからである。合併先の自治体の了承がなければ話は進まない。しかし具体的な話はないまま、合併協議会で佐賀関町立病院は公設民営で存続させると宣言してしまった。その後、私に地域医療振興協会に連絡してくれるよう指示があったのである。これでは地域医療振興協会はうんと言はずがないと思いながら仕方なく協会理事長に伝えたが、すぐに協会理事長から断りの電話をしたと連絡が入った。当たり前だと思ったが、これで佐賀関町側は一気に窮地に立たされることになった。宙に浮いたままの新病院建設計画、公設民営計画の破綻等のため合併協議会で振り上げた病院存続の強気の旗を降ろし、病院建設計画を内に抱えたまま完全民営化路線に舵を切るしかなかったのである。

3人の同僚医師と病院を引き継ぐ決意

2003（平成15）年の5月頃、町の収入役で定年退職した幸龍生さんと某所で会っていた。幸さんは長く町

立病院の事務長を務めた人物で旧知の間柄だった。幸さんによれば、町立病院の行く末が見えない状況を地域住民が不安に思い、みんな引き続き先生たちにやってもらいたいと希望しており、先生たちでやってみませんかという話だった。これまでのいきさつから混乱に少しは加担した者として、現在の常勤医である増永先生、甲原先生、城先生とともに法人を作ってやってみようかといった気持ちが湧いてきた。それで地域の人々が喜ぶならやりがいはあると感じた。その話を医局でみんなに提案したところ、同意を得たので仮の団体名を「佐賀関の地域医療を守る会」として任意団体を立ち上げた。

そのすぐ後、大分市との合併問題を民間の立場から考えようと、佐賀関商工会議所や町老人クラブ連合会、町区長会、町社会福祉協議会など7団体が組織された「佐賀関町懇話会」から説明を求められた。私は「患者さんたちが混乱しないよう今後も地域医療を引き受けたい」との熱意を伝えたところ、懇話会の委員

の方々から強い賛同の意見をいただいた。事実上の「佐賀関の地域医療を守る会」の立ち上げ宣言であり、新聞にも掲載された。また、将来医療法人になり民営化の受け皿となる「長松医師団」といわれるようになった。

その年の8月、佐賀関町は佐賀関病院の民営化の受け皿となる法人の募集を始めた。条件は①職員の全員雇用、②指定された土地に新病院を建設すること、③その際に既にある設計図を使用すること、④これまでの医療介護事業を現行のまま引き継ぐことであった。我々も応募し、結局我々ともう一つ別の医療法人が手を挙げた。面接、ヒアリングがあり、私は法人理念を聞かれたので「地域包括医療の推進」「地域貢献」「自己研鑽」をあげた。このまま医療法人を作り、現行の医療・介護を存続する旨を説明した。いまだ任意団体であり、既存の医療法人ではないことから、たぶんダメだろうと思っていたが、審議の結果、受け皿団体に指名された。我々は日常診療をしながら、馬場にある

MY WAY

私の歩んできた道

—生涯を地域医療に—



佐賀県懇話会で病院の受け皿づくりの計画を説明
(本人：一番奥の右端)

現在デイサービス「ゆりかご」が入っている空き家を借りて事務局とし、早速準備に取りかかった。

しかし、準備過程は必ずしも平たんな道のりではなく、運営実績のない当方に対してはまず、金融機関が協力的でないうえに、町行政も受け皿として決めてはいるが、当方に対しての指名同意書（施設の移譲）の発行が大幅に遅れていた。さらに、議員からは運営能力や資金力、労務管理などに対して疑問の声があがるなど、受け皿指名に対する批判的な動きもみられた。しかし、私たちはこうした動きにも屈することなく、日常診療で目の回る忙しさの中、新病院の開設準備を進めた。

そして2004（平成16）年4月1日、ついに医療法人 関愛会は独立誕生した。我々は4月1日付で佐賀県町立病院を退職し、関愛会の医師として改めて臨時採用されることとなった。

紆余曲折の末、臨時議会で受け皿先として承認

医療法人関愛会を作ったが、法人の新病院譲渡運営開始を控え、町立病院の民営化の手続きを決定する大事な4月議会では8名の議員の反対があり、否決されてしまった。次回5月の臨時議会で再び審議すること

になったが、法人の新病院譲渡運営開始の日は7月1日と決まっていた。その間に私は一部の議員から直接いろいろな話を聞くことができた。

まず、もう一つの医療法人が受け皿として考えられていたらしく、以前に計画した病院建設の設計費用や建設費用も引き継ぐことになっていたらしいこと。町内では今回の受け皿法人の決定に関して町執行部に強く働きかける動きがあること。そして、このままだと町議会で再度否決になり、受け皿先になれない可能性もあるので、いったん関愛会を解散し、もう一つの法人に入る方が良いのではないかともしられた。

私はこれまでの町や議会の取り組みに対して感じていた違和感の原因をようやく理解した。もちろんこんな「指導」に対しては断固拒否したが、地域の人たちの期待に応えようと必死に準備をしてきたことにむなしさを感じざるを得なかった。失望感が強かった。

5月に臨時議会が始まったが、私はどうにでもなれと思っていた。ただ否決されたら、記者会見を開き真実を話すことを決めていた（実はすでにその準備をしていた）。議場には町立病院の職員も多数傍聴に来ていた。どうなるか不安だったのだろう。ところが午後の採決では賛成派が多数になってしまい議案はあっけなく承認されたのである。病院職員は喜んでいて、万一、否決になった時は私にも覚悟があった。

臨時議会の決定により医療法人関愛会は正真正銘のスタートを切った。ただ、民営化にあたり町から補助金を一切受け取らなかった。行政と距離を置きたかったからである。（つづく）

ヒアリングにて当研究所が執筆

MY WAY

私の歩んできた道

—生涯を地域医療に—



社会医療法人関愛会会長 (こうざきクリニック院長)

ながまつ のぶや
長松 宜哉

(4回シリーズ：その4)

民間病院としてのスタート

2004（平成16）年7月1日、関愛会佐賀県病院は紆余曲折を経て晴れてスタートをきった。佐賀県病院90床（急性期病床50床、療養型病床40床）、介護施設「ひまわり」、一尺屋診療所を町から引き継いだことになる。

新規開設にあたって、あらためて職員に関愛会の理念、「地域包括ケアの推進」「地域貢献」「自己研鑽」を心に刻むようお願いした。

これまで佐賀県町立病院は無理な救急搬送制度の下、外科の開腹手術等も行ってきたのだが、大分市との合併を機に専門性の高い開腹手術や脳外科疾患、心臓病疾患等は近隣の連携できる中核病院に任せることとした。中核病院と密な連携を取りながら医療は総合診療に特化し、リハビリテーション、社会復帰に重点を置いた病院に移行するほうが地域の人たちには受け入れられるだろうと考えた。

また、これまで行ってきた一次救急は365日続けることで地域の人には安心感が得られると考え、一次救急指定病院になった。市内の専門病院との連携、介護施設との連携を強化するため社会福祉士による総合医療福祉相談室を佐賀県病院に初めて設置した。

職員の雇用と意識改革

民営化の約束である職員の全員雇用については、これまでの町立病院ではかなり以前から正規職員の数を制限する一方、臨時職員の数が増えてきていた。そのため、正規職員と臨時職員の待遇面での格差が問題になっていた。

今回の民営化で正規職員は会社都合退職となり、いったん高額な退職金を手にすることができ、給与は下がっても佐賀県病院に再就職となる。一方、臨時職員は新たに正規職員となり身分が安定するため、一律民間ベース



こうざきクリニック

MY WAY

私の歩んできた道

—生涯を地域医療に—

MY WAY



新病院の辞令交付式

の給与体系にすることにさほど抵抗を感じなかったようだ。

実は民営化にあたり、私は給与体系をこれまでの公務員ベースから民間ベースに変更するだけでこの佐賀関病院は黒字化できると確信していた。実際、町立病院時代の人件費比率は64%であったが、民営化1年後には46%まで圧縮できたのである。

また、町立病院の時代いつも思っていたことだが職員の就労意識が民間とは異なり、みんな違う方向を見ながら仕事をしている感じがあった。同じ職場内で派閥争いのような職員の対立も見受けられたり、病院内でトラブルがあると病院外の人がクレームをつけてくることもあった。それは田舎の公立病院ではありがちな光景であった。

そのため、私は民営化の意味を職員に教え、意識改革をしなければならなかった。民営化したこの病院は自分たちで頑張って運営しなければつづれてしまい、せっかくの職場が消滅すること、つづれないためには全員が一致協力して患者さん、利用者の方の満足度を上げる努力をしなければならないこと、職場に不満があった場合には病院外の方が助けてくれるわけではないことなどを強調し意識改革を断行した。

そのためにまず接遇訓練が必要だった。すぐ看護師



関愛会学術集会

長2名を半年間東京に研修に行かせて、接遇インストラクターの資格を取らせ、院内の接遇訓練を継続的に行った。それが院内研修の第一歩だった。

こうした取り組みは良いと思ったことをすぐ実行に移せる民間でなければできない事だった。

また、医療や介護の水準を常に高めていくため、スタッフのスキルアップに取り組んだ。医師の先生方や検査技師、栄養士などそれぞれの専門分野の学会や研究会に積極的に出席して新しい知識や技術を修得していただくと同時に、自らの研究成果を積極的に発表してもらい、学術雑誌などへの研究論文の発表も奨励した。

こうした対外発表だけでなく、年に2回「関愛会学術集会」を開催して、それぞれの職場での問題解決の工夫や新たな取り組み、調査活動などを発表する機会を設けた。こうした発表の場ができたことでスタッフの間に自ら積極的にテーマを見つけて研究考案したり工夫する雰囲気が醸成されてきた。この学術集会には関愛会以外の人たちにも参加を呼びかけ、私たちの活動を広く知っていただく機会にした。

新病院建設

民営化した後、大分医科大学からの常勤医の派遣が



建設当時の佐賀関病院

無くなった。当院の常勤医の最低医師数は6人が必要であり、我々はまだ足りない医師を探さねばならなかった。

こうしたなか、自治医科大学からの派遣も通常は民間病院への派遣は認められていないため無くなるはずだったが、へき地診療所への代診派遣実績や、今後も佐賀関町の公的な医療を支える機能を残しているとして特例をつくってくれ、1年間だけ派遣を認めてくれた。それから当院で勤務実績があり、姫島診療所に勤務していた大屋譲先生を派遣してくれ、一緒に奥さんのジュリエッタゆり先生も勤務してくれることになり、総勢6人態勢でスタートできることになった。また、自治医科大学より派遣の大屋先生は1年後義務年限あけとなったが、そのまま佐賀関病院に就職してくれ、管聡先生も義務年限があけた翌年に当院に就職してくれた。

一方、佐賀関町との契約では、新病院を介護施設「ひまわり」の海側の埋め立て地に建設しなければならなかった。民営化の受け皿指名を受けて、我々が一番苦労するだろうと考えられていたのが病院建築費用の捻出だったと思う。地域の銀行は事業経験の無い私たちには積極的に融資に取り組もうとしてくれなかったからである。

しかし、捨てる神あれば拾う神ありで、私の県外の知人が私たちが本気で民営化の受け皿になろうとしている覚悟を知って、わざわざ福祉医療機構を紹介してくれたのである。その方の紹介は絶大で福祉医療機構大阪支店に出向くと本当に好意的に対応していただき、総額11億円の融資の内諾を得たのである。それだけではなく、地元の銀行につなぎ融資のお願いまでしていただいた。本当に感謝したことを覚えている。

新病院のコンセプトはゆったりとした広いハーバリーブューの病室でゆっくり療養していただき、リハビリ室を外から見えるようにして地域の人にリハビリに力を入れている病院だということを強く認識してもらうこととした。また、医療連携の関係から診断機器、特に最新のヘリカルCTとMRIを導入し、診断技術の向上を目指すようにした。同時に病院の前の市道を挟み、佐賀関診療所を新しく建設し、私が入る内科と眼科、耳鼻科の外来を造った。

2005(平成17)年12月、新病院は完成し新たなステージが始まった。旧病院は取り壊し更地にする約束だったので、その費用を全額佐賀関病院で負担し対応した。

これまで20年間老朽化した病院でしか勤務したことがなかった私としても新病院は本当に夢のようだった。患者さんからも、以前から働いている職員からも「新病院を造ってくれてありがとう」と感謝された。新病院建設を機に職員全体の目標として、病院機能評価機構の審査を受けることとなった。

経営危機、民間の発想で切り抜ける

2005(平成17)年12月に新病院は完成し、佐賀関病院は実質的に新たなスタートをきった。2006(平成18)年度からは病院建設費の償還が始まるが、4月の診療報酬改定では療養病床の報酬の大幅なカットが含まれ

MY WAY

私の歩んできた道

—生涯を地域医療に—

MY WAY

ていた。そのため、大幅な減収となり赤字決算が見込まれることになった。

2006（平成18）年度中に何か対策を取らないとこのままずるずる赤字を重ねていくことになる。国からは療養病床を介護老人保健施設に移行して、療養病床を減らしていきたいという国策が見え隠れしていた。しかし、移行型介護老人保健施設にすると、さらに収益を減らすことになり、その分人員の整理もしなければいけないことになる。

ここで私が出した結論は、民営化して職員を全員雇用した3年後に人員整理は行いたくないということであった。そこで既存の療養病床を新しく認められた回復期リハビリテーション病棟に移行し、逆に増収を目指すことを考えた。しかし、そのための人員確保の基準は厳しく、リハビリのセラピストだけでもさらに10人ほど増員しなければならず、はたしてそれだけの人数を集められるかが焦点となった。

2006（平成18）年、偶然に高校時代の親友の^{なますごし}鮎越英夫君と再会した。彼は後藤学園の智泉福祉製菓専門学校^{なますごし}の事務長兼専任講師をしており、社会福祉士コースの医師講師の依頼に来てくれたのであった。最初の1年は私自身が講師を務めたが、その後関愛会から医師講師を出していくこととなった。その縁があり、リハビリのセラピストについてもつながりの深かった彼に増員の協力をお願いした。彼の協力のおかげで2007（平成19）年度には人員が整い、療養病床40床を回復期リハビリテーション病棟に移行することができた。

以後病院リハビリテーションの充実を図っていくこととなるが、実質赤字年度は2006（平成18）年度だけで以後ずっと黒字を重ねることができた。このことも公立病院では身動きが取れず、だらだら赤字を重ねざるを得ないところを即断即決で対策をとれたことが大きかったと感じた。



佐賀関診療所

地域の最低限の医療の保証

2004（平成16）年に病院を引き継いだ時、一尺屋診療所も一緒に引き継いだ。私の中では、人口が激変し、もし病院が無くなっても中学校区に一つでも診療所があればその地域の最低限の医療は保証できると考えていた。そのため、佐賀関病院に併設して佐賀関診療所をつくったのである。

佐賀関にはあと一つ神崎校区があり、もし開業医の先生が高齢で存続が危うく無医地区になるような状況になれば、神崎地区にも診療所を作らねば関愛会の設立趣旨にもかかわると考えていた。そこで2006（平成18）年、開業医の高齢化に関する様々なうわさが聞こえてくるようになったため、こうざきクリニックを設立した。ここを新築するにあたっては、デイケアもみの木を併設することで通所リハビリテーションの拠点をつくった。

ただし神崎地区の開業医の先生方には立派な後継ぎの先生がいて、こうざきクリニックの開設は私の勇み足だったことが後で分かった。その後は競合しないように運営している。

旧佐賀関町外に次々に診療所を開設

2009（平成21）年、県立三重病院に勤務する後輩た

ちから相談があった。県立三重病院が消滅し、豊後大野市民病院と統合されることになったが、われわれはこのまま今の患者さんを診ていきたいので佐賀関病院のような病院を設立できないかという相談だった。当時の県立三重病院の内科部長の宇都宮建志先生、飯尾文昭先生、小児科部長の別府幹庸先生の3人だった。

実は、相談を受けた前年から大分県と豊後大野市と医師会をはじめとした有識者と地域住民代表で検討委員会があり、私も委員として出席していた。そこで統合が決まったが相談はその後だった。

県立三重病院は前述のとおり若い頃こだわりを持っていた病院なので無くなることは悔しいと思ったが、この統合問題は最後まで行政の発想だと割り切っていた。3人の先生の気持ちはよく分かったが、もう少し早い段階で決意表明をすれば違った結果になったかもしれないとは思った。

現在3人の先生でできることは新しい病院を設立することだが、おいそれと新病院は出来ない。したがって、関愛会で診療所をつくらうということになり、土地探しから始め三重町小坂に診療所を建設した。コンセプトとしては、入院ベッドは無いが県立三重病院と同等の外来機能を持った診療所ということで、CTやMRI、内視鏡等検査機器はすべてそろえた重装備の診療所を建設した。それも3人がこれまで通りの診療ができるようにして、これまで通り患者さんにも不便を感じさせないようにしたいという配慮からだった。

2010（平成22）年9月、三重東クリニックは誕生した。県立三重病院がなくなって、大量の患者さんが流れてきたため、開院直後から患者数は1日平均100人で大混雑。佐賀関病院の外来患者数を凌駕する数であった。

2011（平成23）年4月には、同じ豊後大野市にある清川診療所が閉院の危機を迎えていたので法人で譲



三重東クリニックの落成式(本人：前列左から5人目)

受けた。自治医科大学一期生の竹田津文俊先生が初めて赴任したへき地診療所で、自治医科大学出身者にとってはへき地医療のメッカみたいなところと認識されていた。デイケアセンターを併設して豊後大野市民病院院長だった坪山明寛先生が同病院を辞任された後に院長になっていただいた。

三重東クリニックを設立したことで、関愛会の診療所建設は旧佐賀関町内にとどまらなくなっていった。2012（平成24）年4月に大分市坂ノ市に訪問診療クリニックのぞみを開設し、6月には大分市王子町に王子クリニックを開設した。2013（平成25）年12月には訪問診療クリニックのぞみを発展的に解消し、坂ノ市駅前前に3階建ての坂ノ市クリニックを新築した。

坂ノ市クリニックは19床の有床診療所でスタートしたが、2018年（平成30）年4月から36床の坂ノ市病院となり、通所リハビリセンター坂ノ市もみの木を併設している。

2018（平成30）年4月には、大分市横尾によつばファミリークリニックを開設した。ここは大分大学医学部総合診療科とタイアップして学生教育や総合診療医の教育施設として使用する目的をもって建てられた。管理者は総合診療科に入局している自治医科大学の後輩である平山匡史先生にお願いしている。

MY WAY

私の歩んできた道

— 生涯を地域医療に —

MY WAY

さらに2018（平成30）年11月には、北海道江別市の市民病院を退職し、訪問診療に熱意を燃やす自治医科大学の後輩である日下勝博先生を応援するため、北海道江別市に江別訪問診療所を開設した。また、2019（平成31）年4月には、地域医療振興協会の紹介で、東京都北区王子に北区王子クリニックを開設した。

関愛会の診療所のほとんどが訪問診療を積極的に行っているのが特徴である。

関愛会の介護施設

介護施設は民営化当初、通所介護施設、訪問介護施設、居宅介護施設「ひまわり」を町から受け継いだ。その後2007（平成19）年7月、こうざきクリニックに「こうざきデイケア・リハビリテーションセンターもみの木」を開設した。また、2009（平成21）年5月には一尺屋に小規模であるが有料老人ホーム「みかんの家」を開設したが、この建物は佐賀関病院に入院して最後まで看取った難病の患者さんが遺言で関愛会に寄付してくれた住宅で、それを改築して使わせてもらった。

その後、2011（平成23）年11月、清川に「きよかわりハビリテーションセンターもみの木」、2012（平成24）年7月、佐賀関病院の前の国道の反対側に有料老人ホーム「海風」・デイサービス「海風」、2014（平成26）年4月、介護老人保健施設「せきの郷」を開設した。せきの郷の開設は一尺屋の住民の熱心な要望があったからであり、閉校した旧一尺屋中学校の校舎を利用した。

さらに2015（平成27）年4月には、こうざきクリニックに隣接して訪問看護ステーション「いろは」とナーシングホーム「輝」を開設し、ほぼ佐賀関地区の地域包括ケアシステムを作り上げた。また、2017（平成29）年4月には、市内松岡にある介護老人保健施設「やす



きよかわりハビリテーションセンターもみの木

らぎ苑」を医療法人松寿会から関愛会に統合した。

へき地診療所への診療応援（代診派遣）と社会医療法人の認定

町立病院のころから自治医科大学出身医師が多かったので、自然と後輩が勤務するへき地診療所に不定期、あるいは定期的に診療応援に行っていた。民営化した後も姫島村診療所はじめ定期的に診療応援を行っていた。その件数は年によって異なるが年間50～150件に及んだ。その実績が評価されて大分県のへき地医療支援病院に認定され、また公益性の高い社会医療法人にも認定された。

また、へき地診療所だけでなく、2007（平成19）年には私の故郷の竹田市にある竹田市医師会病院の内科医が不足し、救急医療ができなくなったため、県の要請で佐賀関病院から代診医を週1～2回の頻度で派遣した。県内のどの公共医療機関もできなかったことで県には非常に感謝された。こうした民営化後の実績で、関愛会佐賀関病院は公立病院の完全民営化のモデルとして全国的に評価されることとなった。特に公的補助金に依存しない点が極めて珍しかったのかもしれない。

私は2011（平成23）年に住友生命社会福祉事業団（現



地域医療貢献奨励賞表彰式（本人：前列左から2人目）

一般財団住友生命福祉文化財団）から地域医療貢献奨励賞をいただき、東京での表彰式に臨んだ。自治医科大学を卒業以来、一貫して地域医療に取り組み、特に佐賀関町立病院を引き継いで関愛会佐賀関病院とし、全国的に「官から民へ」の成功例として評価していただいたものと受け止め、その後の大きな励みとなった。この地域医療貢献奨励賞は自治医科大学の後援を得て全国の都道府県から推薦された中から長年へき地医療に取り組んできた医師に贈るもので、その目的は医療に恵まれない地域における医療の確保の向上、住民の福祉の増進にあった。この賞ができて4年目で、大分県からの受賞は私が初めてだった。

地域社会との絆

佐賀関病院を地域に根ざした病院にするためには、地域の人たちの生の声を病院経営に反映させていくことが大切である。関愛会内部だけではどうしても独善や思い込み、組織にとらわれた先入観などに支配されがちだ。そこで佐賀関地区の区長や老人クラブの会長、社会福祉協議会会長ら地域の人たちに評議員会に参加してもらい、利用する立場から施設や設備、スタッフなどへの率直な意見や問題点を指摘していただくようにした。



関の鯛つりおどり大会

また、スタッフのチームワークや地域の人たちとの交流を活発にするため病院祭を催したり、地元行事に積極的に参加したりするようにした。病院祭は毎年10月に病院や佐賀関診療所の敷地、高齢者介護施設「ひまわり」などを会場にして小学生の絵画展や病院の歴史をたどる写真展、プロレスが得意な職員による「ちびっこレスリング教室」やブラジルサンバなどを開催し、職員や佐賀関商工青年部が模擬店を出し、大いに盛り上がっている。また、地元の伝統行事では関の鯛釣りおどり大会に参加したり、お年寄りのグラウンド・ゴルフ大会に佐賀関病院杯を提供するなど、地域密着を心がけている。

広報誌の発行も始めた。最初は事務の片手間に年に1、2回しか発行していなかったが、のちに広報担当者を決めて定期的に発行するようになった。顔写真付きでスタッフの人物紹介をしたり、入院患者の病気回復の喜び、高齢者介護施設利用者の趣味などを掲載することで、他の人の励みになったり、スタッフと施設利用者、さらには地域の人たちとの距離を縮める効果をもたらしている。

最期まで地域医療のために

2014（平成26）年10月、社会医療法人関愛会は創立

MY WAY

私の歩んできた道

—生涯を地域医療に—



広報誌「広報せきあい」

10周年を迎え記念式典や記念行事を催した。広瀬大分県知事や釘宮大分市長（当時）を来賓に迎えてあいさつに立った私は、民営化当時の苦難の日々の中、町議会の議場で言われた「こいつらに経営を任せたら5年ももちませんよ」という言葉がよみがえってきた。10年続いただけでなく収益も2倍に、また職員数も2倍になったぞと心の中では誇らしかった。

ちょうどこの時、60歳の還暦を迎えた私は、人生のひとつの節目と考えて社会医療法人関愛会の理事長を筆頭理事の増永義則院長にバトンタッチし、自分は会長になり、理事長の補佐をすることとした。関愛会は歴史が浅く、前例がないだけに自分で自分の去就を決めていかなければならないと思っていた。父親が63歳で亡くなったことも自分の中では引っかかっており、次の世代に早くつないだほうが良いと考えていた。

訪問診療ができる診療所とその後方支援の小規模病院、地域での生活を支える各種介護施設。地域包括ケアシステムを作り上げていく手段に関愛会は確立してきたと思う。今後はその力を持続することとその範囲を広げることが必要である。それをやり抜く鍵となるのは人材育成であり、円滑な世代交代だと思う。若い医師が今後引き継いでいってくれることを大いに望ん



訪問診療を終えて

でいる。

まだまだ設立15年である。周囲には半世紀以上経過した医療法人がたくさんある。継続するためにはその時代時代にあった地域医療システムに柔軟に対応することも必要である。関愛会にはそれに対応できるポテンシャルがあると信じている。

医師になって40年。佐賀関の地に根を下ろして33年になり、患者さんから「親、子三代診ていただいています」と言われて、時の流れの速さに驚いたことがある。医師として40年やってこれだけでも自分としては大したことだと思っている。卒業したころのあの不安感は今では懐かしく感じられる。子どもたちも手を離れ独立し、それぞれの家庭を持ち孫にも恵まれた。これからを余生というのであれば、これからの余生も「死ぬまで働きたい」と思うばかりである。

最後にこれまでへき地診療をはじめた時から二人三脚で、患者さんや地域の方々とのつながりを大切に、仕事で忙しい私をずっと支え、子どもたちを立派に育ててくれた妻に心から感謝し、私の歩んできた道のふり返りを終えることとする。（終わり）

ヒアリングにて当研究所が執筆

MY WAY 私の歩んできた道

— 生涯を地域医療に —

発行	2019年9月吉日
発行者	社会医療法人 関愛会 〒879-2201 大分県大分市大字佐賀関750-88 TEL 097-575-1172 FAX 097-575-0732
印刷	佐伯印刷株式会社 〒870-0844 大分県大分市古国府1155-1 TEL 097-543-1211 FAX 097-554-4028

◎本書は、(株)大銀経済経営研究所発行の「おおいたの経済と経営」2019年5月号～8月号に掲載されたMY WAY 私の歩んできた道 — 生涯を地域医療に — を編集したものです。

※(株)大銀経済経営研究所（〒870-0823 大分県大分市東大道1丁目9番1号 TEL 097-546-7770）は大分銀行グループの地域シンクタンク（調査研究機関）。大分を拠点に、地域経済に関する調査研究や、企業経営・人材育成に関する経営サポート業務を行うとともに、月刊誌「おおいたの経済と経営」の発行など活動の成果の幅広い情報発信や提言活動を行っています。